

ファイナンスは実践的な学術領域であり、社会に直結している学問です。
金融のグローバルスタンダードを学び、現場で活躍することを望んでいます。

経営学研究科
経営学専攻
山寄輝 教授

PROFILE

学歴：1996年 東京理科大学 理学部 数学科卒業、1998年 東京工業大学大学院 総合理工学研究科 知能システム科学専攻 修士課程修了(修士(理学))、2012年 東京大学大学院 経済学研究科 金融システム専攻 博士課程修了(博士(経済学))

職歴：1998年 東京三菱銀行(現 三菱UFJ銀行) 入行、日本銀行金融研究所、みずほ第一フィナンシャルテクノロジーを経て、2012年 法政大学 経営学部及び同大学院 経営学研究科に着任

laboratory information

研究科全体の特長は、学生の研究の質が高いことにあると自負しています。社会人大学院の修士課程でも論文提出は必須であり、論文審査を経て修士号を取得することになります。厳しい環境の中で問題意識を持ち真摯に研究に打ち込む学生が多く、非常に良い環境だと感じています。そうして得た知識を現場に持ち帰り、活用してください。自分の研究成果を社会に還元し、日本の金融業界に変化をもたらせる人材に成長していくことを望んでいます。



ファイナンスとテクノロジーの学際領域を専門としております。ファイナンスは証券投資や金融資産価格とそのリスクの評価、企業の資金調達などを研究する学問です。金融市場や金融取引では、お金の金利、外国為替レートなどが数値で表されるため、高度な数学やコンピュータとの相性の良さがファイナンスの特長としてあげられます。現在、金融業界は大きな変革期にあり、ビジネスの手法が根本から変わることが予想されています。その背景には、昨今の人工知能や非数値データの解析力の向上、コンピュータの計算処理の高速化などテクノロジーが金融ビジネスに活用されようとしています。いわゆる以前の「金融工学」や「数理ファイナンス」と呼ばれるイメージでは捉えきれないほど進化していることから、私の専門領域は「フィナンシャルテクノロジー」と呼ぶ方が適切だと考えています。一方で、日本の金融ビジネスは欧米に比べ、遅れをとっていることを認識しなければなりません。日本の金融業界は革新的な技術や発想が生まれにくい土壌であることを自覚するとともに、ファイナンスを指導する立場としては、金融を身近なものと感じてもらおうことが重要だと考えています。授業で

は、身近な企業を例に出し、学生が興味を抱きやすい講義を行っています。私自身が金融機関に勤めていた経験から感じたことでもありますが、金融は社会の構成要素の一つだと意識し、あらゆるビジネスにつながっている業界であると自覚することが重要です。法政大学大学院でグローバルスタンダードの知識や理論を身につけ、現場で活かす。第一線で働く場からファイナンスの考え方を啓蒙することが日本の金融ビジネスを変化させる一助になるでしょう。

研究室では、主に社会人大学院生の教育を担当しております。社会人経験を経て実務に根ざした問題意識を持って活動している学生が多く、学術的、実務的な議論が多様に行われています。また、ファイナンスの学会は都内で開催されることが多く、アクセスのしやすさから多忙な社会人でも集まりやすい市ヶ谷という場所のメリットは大きいでしょう。そういった恵まれた土地であることも存分に活用し、学術的視点からファイナンスを学び、率先して多くのつながりを持ち、情報交換などを行ってください。お互いに切磋琢磨しあえる環境で成長し知性と気概を持って社会で活躍してくれることを期待しています。

研究だけでなく成果物を作り上げる手法も習熟してください。
大学院での経験を自身の糧とし成長してほしい。

デザイン工学研究科
システムデザイン専攻
田中豊 教授

PROFILE

1985年東京工業大学大学院総合理工学研究科精密機械システム専攻修士課程修了。その後東工大精密工学研究所助手を経て、1991年法政大学専任講師、1992年同助教授、2002年同教授。2014年から法政大学情報メディア教育センター所長を兼務、現在に至る。工学博士(1991年・東京工業大学)

laboratory information

私の研究室では、大学院生が常に自ら考えて行動し、課題に挑戦するための知的好奇心を育み、研究を遂行する自主性を養えるように指導しています。そのために、研究成果を積極的に国内外の学会で発表することを義務付け、研究室での成果は毎年モーションエンジニアリング展で公開し、外部の方々との関わりを持たせるなど刺激ある研究を推進しています。今後も企業との連携を重視し、社会で活躍する人材を育てることを目指していきます。



研究室のテーマは大きく4つの分野に分かれ、「グリーンフルードパワー」、「次世代モーションメカニズム」、「マイクロメカトロデバイス」、「感性とインターフェースデザイン」と幅広いデザイン工学分野を研究テーマに設定しています。どのテーマも空気や水、油、機能的流体などのさまざまな流体をパワーや信号の伝達に用いるため、自動車や飛行機、建設機械、娯楽施設から医療福祉、マイクロマシンにいたる幅広い分野で利用されており、まさに社会の基盤を支える技術といえるでしょう。

社会に根付いた技術を学ぶことは社会的な要請が強く、民間企業など外部の方々との接触の多さも魅力として挙げられます。具体例として「フルードパワー」の研究では、自動車メーカーと駆動系の動力伝達の仕組みを産官学連携し次世代の高圧油圧システムの開発や問題解決に向けて取り組んでいます。平成22年度には「油中気泡除去技術の開発」が、補助金支援テーマに採択されるなど国が舵取りを進めております。「感性とインターフェースデザイン」の

研究では、福祉・介護士の方々の一つひとつの動作を解析し、負担がかかる工程を分析することで、負担軽減の一助を目指すなど、超高齢社会である日本において必需の研究であると言えるでしょう。

大学院では、学生が外部の方と触れ合い自身の研究を不特定多数の方に見てもらえることが重要だと考えています。展示会で使用するパネルの制作や学会で発表する資料の準備などは学生に任せるとして、一連の流れを学生が経験し、より自身の研究であると自覚を持ち意欲的に行動する自信がつくとともに、同じ研究者の目が入ることによって質疑が生まれ、新しい気づきや展開が望めます。この研究を進める工程はあらゆる企業で役に立つ普遍的な経験になるでしょう。課題の発見や解決方法を議論することに加え、到達地点を定め、スケジュールを設定し進めていく手法を知れることは、直接的に研究内容と業務が結びつかなくとも多岐にわたる知識と技術の融合により、社会で活躍する人材への育成、学生の財産になると確信しています。